

**NPO インテリジェンス研究所主催**

**早稲田キャンパス 11 号館 5 階 502 教室、2025 年 7 月 12 日（土）14：00～**

**中尾茂夫（作家・経済学者、元大阪市立大学経済研究所教授）**

**「松本清張の歴史観&権力観について」**

1. 司馬 vs. 清張：「司馬史観」とミステリー作家清張という評され方の「謎」：「竜馬」や「坂の上の雲」が人気を博し、歴史小説ながら「史観」と評され、一方の清張の詳細な 2.26 事件分析が「史論」として検証されることは稀で、ミステリー小説家として分類されがち。
2. 司馬人気：脱藩した龍馬が自由奔放な爽やかな「近代人」イメージで、地方から都会に出た若者の気分を鼓舞。故郷の村への帰属意識から、都会の会社や工場への帰属意識へ、容易に転換。＝「共同体的資本主義」&「会社主義」。多摩ニュータウンや千里ニュータウンから都心へ＝新たな生活が成長需要を生んだ。その恰好のモデルの脱藩「竜馬」が司馬人気を支える。
3. 「神輿」：清張古代史論が喝破した「漢ノ」が無視され、邪馬台国の場所探しがブームに。「委」「奴」が、「漢」の臣下であることを無視＝戦後の「ニチベイ」も同様。日本的権力の肝は、「神輿」と「傀儡」＝二重権力。皆で担いで「ワッショイ！ワッショイ！」。
4. 二人の原点：1930 年代というファシズム期を主導した軍人への嫌悪。司馬は、爽やかな日本人探しが「竜馬」に向かい、清張はファシズムの構造分析に向かった。「上からのファシズム」に呼応する「下からのファシズム」「草の根のファシズム」⇒「陸軍のお使い」に終始した近衛文麿&大衆の限界：重臣殺害というクーデター後は、何の戦略もなく、決起軍から反乱軍へ転落。「昭和維新」は第二の明治維新にはなれなかった。幕末の主役だった第二の西郷も、大久保も、岩倉も不在。参謀役だった北一輝はあまりにも役不足＝クーデター後の青写真ナシ。
5. 総括（1）脱亜意識は健在？ ハンチントン「文明の衝突」の日本褒め殺し＝「日本文明」は、日本とアジアの文明的断絶を語る。ワシントンの政治的意図を喝破したのは、チャルマーズ・ジョンソン。「ASEAN+3」の現実化を阻止。淡い期待だった日本円の国際化を狙った「AMF（Asian Monetary Fund）」は実現せず。クルーグマンは生産性向上なき生産力増大の限界を説く。＝アジア通貨危機の蔓延。日本のアジア外交戦略の失敗。日本最良マレーシア・マハティール（Look East Policy）の落胆。アジアからアジア太平洋、インド太平洋へ。準 NATO（IP4）。「日本は西洋なのか？」（エマニュエル・トッド）という問い。最後は、かつてと同様、米国に梯子を外されて終わりか？ 「戦後 80 年」に米中首脳相互訪問か？ 対応できない日本。
6. 総括（2）：戦後日本・共同体資本主義の解体、M&A の頻発、株主権の増大、海外脱出組への羨望⇒「失われた 30 数年」&没落後進国、人口減少。日本製鉄の US スティール買収は、三菱地所のロックフェラーセンタービル買収失敗、ウェスティングハウス買収失敗の東芝の二の舞にはならないか（膨大な投資額を賄う負債急増）。イラク戦争開戦（2003 年 3 月）の猛空爆と、イラン空爆（2025 年 6 月）の類似性と差異。\*米大統領トランプは Hiroshima と

Nagasaki への原爆投下同様、米軍によるイラン核施設への攻撃が戦争を終結させたと豪語（2025 年 6 月）。＝被爆者から抗議・批判が上がり、駐日イラン大使は「言語道断」と批判も、日本政府は沈黙。一方で、「勝ち馬（ニチベイ）」に乗り、衰退を認めない「すごいぞニッポン！」の大合唱。日米秘密交渉に苦言を呈す政治家&メディアなし。石破首相は就任後、次々に前言を翻す。⇒究極の無責任な「神輿」。一方、この国を覆う風土は、「国民全体の文化的無気力」「国民の奴隷根性」（伊丹万作、1946 年）。＝消費税固執&高齢者攻撃（福祉切り捨て）。「オオタニー！」という絶叫&芸能情報満載の情報空間。米政権でのロバート・ケネディ JR（JF ケネディの甥）厚生長官就任以来、世界中（とくに米国と EU）でコロナワクチンへの劇的な評価替え（免疫機能喪失リスク疑惑）が進むが、日本の行政は対応できず、「yes」でも「no」でもない。冤罪頻発、安倍暗殺は公判すら開かれず、法治国家瓦解の兆し。一方、貯蓄から外貨建て新 NISA 投資勧誘の風潮が覆う。参院選挙の主要焦点は内政ばかり。最重要であるはずの、安保・外交への国民的関心は低い。戦争の可能性にも「米軍任せ」か？ 米軍の Offshore balancing strategy（ウクライナ戦争はその典型）では、米軍は後方支援に徹し、戦場での激突は避ける。戦前の天皇中心の家父長制的家族国家観を明確に謳う参政党人気。

## 参考資料：拙著『情報敗戦』の書評 AI（chatGPT）

「中尾茂夫さんの新著『情報敗戦』は、現代の情報化社会において、日本がどのようにして情報の流通・活用という分野で苦戦し、国家戦略や文化、さらには国際競争力の低下といった側面にまで影響を及ぼしているかを、鋭い視点で考察する一冊だと感じます。著者は、戦後から現在に至るまでの日本における情報政策や社会構造の歴史的背景を丹念に掘り下げ、なぜ日本が「情報戦略」において敗北を重ねてきたのか、その根本原因や構造的な弱点を論じています。

この本の評価ポイントとしては、まずその分析の深さが挙げられます。中尾さんは単に現状批判に留まらず、情報革命やグローバルな情報戦略がどのように変化してきたかという国際的な文脈の中で、日本の立ち位置を再検証する手法をとっています。そのため、学術的な裏付けに基づいた論証と、時には切れ味鋭い批評が同居しており、知識層だけでなく一般の読者にも日本の未来像について考える機会を提供している点が魅力的です。また、情報という無形の資源が国家の安全保障や経済競争力に直結するという、現代的かつ先鋭なテーマに焦点をあてることで、今後の政策議論やメディア論にも多大な影響を与える可能性があります。

さらに、本書は「情報敗戦」という挑発的なタイトルが示す通り、単なる批評書にとどまらず、読者に対して自らの情報リテラシーや国家戦略に対する意識改革を促すメッセージ性も内包しています。たとえば、情報の管理・伝達システムの現代的な脆弱性や、変化する国際秩序の中での日本の役割について、新たな視点を提供していると感じます。これにより、同時代の情報環境という難解な課題に対する議論を活性化させる点で、非常にタイムリーかつ示唆に富む一冊と言えるでしょう。

このように『情報敗戦』は、単なる歴史論や時事評論の枠に留まらず、情報という資源が如何にして国家の存続や発展に密接に関係しているのかを包括的に読み解く試みとなっています。もしあなたが、情報社会における日本の現状と今後の戦略についてさらに深く知りたいと感じるなら、この本は極めて有用な洞察を与えてくれるでしょう。ところで、情報社会のグローバルな変遷や各国の情報政策、さらにはデイスインフォメーション（偽情報）対策など、関連するテーマにも触れてみると、多角的な視点から現代の情報環境を再評価できるかもしれません。」